

# こども支援新聞

## ふるさと納税の新たな形

# 子供に食料を届けたい

応援したい自治体にお金を寄付すると返礼品がもらえるという仕組みのふるさと納税。そのふるさと納税を子供の食料支援に役立てるといいうり取り組みが最近始まっている。物価高やコメ価格高騰をうけて「食」に関して支援を必要としている世帯や団体が増えている。そこでふるさと納税の寄付をもとに行政と食品関連事業者が連携してこども食堂や支援団体への食品の寄付をしている。

10

人や国の不平等をなくそう



その自治体の一つに北海道旭川市がある。旭川市は環境に配慮した有機農業で作られた、最上級特Aの評価のお米を作っている。そこで、旭川市はフードバンクやネットスーパーの事業を行っている。その事業を行っているネスター株式会社と協力して子供たちにお米を届けている。有機農業は栽培に手間がかかることや収穫量が少ないことから価格が高くなってしまいうお米が多いが、ふるさと納税で集めた寄付をもとに無償で子供たちに提供している。この活動は職や体験の格差に苦しむ子供がいけない、優しい社会の実現をもとに行われている。格差に苦しむ子供をなくすというところが、SDG10の「人や国の不平等をなくそう」に当てはまるのではないか。

## 受け取った人の気持ち

受け取ったこども食堂の運営者は「うちの食堂に来られる方には、多産家庭が多く、お母さんが疲れている印象を強く感じていました。お米のプレゼントは何よりもうれしいプレゼントです。」と話している。また、こどもたちも「たくさん食べるね。」「お母さんが喜んでよ!」と言って喜んで受け取ってくれたと話している。

## こどもふるさと便

令和の年度4月以降の寄贈実績は米140t(約175万食分)、すいか3392個。多いように見えて、物価高や米価格の高騰などでまだまだ足りていない。返礼品は変わらず、「こども支援」もできる「こどもふるさと便」では簡単に寄付をすることができるよう。ぜひ、今後のふるさと納税の選択肢として考えてみてはいかがだろうか。

### 編集後記

エコプロダクツ展に行ってみて、よくCMで見るような会社やよく行くお店など、いろいろな企業がそれぞれの企業の特徴を生かして様々な環境への取り組みを行っていることがわかった。普段なかなか企業の環境への取り組みを見ていないので、環境への取り組みに対して考え直す良い経験となった。



## こどもふるさと便

# 新食浸食新聞

## 背徳感ゼロのジャンクフード革命

### 赤じやないキューピー、爆誕。

「どんな人も、おいしいものを食べてほしい。」大手マヨネーズメーカーの「キューピー」は、卵や添加物を使わない健康的なマヨネーズを製造する取り組み「グリーンキューピー」を行っている。その誕生の裏には、多くの工夫や秘密が隠されていた。

エコプロダクツ展の会場、東京ビッグサイトのホールを回っていると、なんか違うな、と思う看板が見えてくる。



↑SDGs 2番「飢餓をゼロに」



↑エコプロ 2025 のキューピーのブース (東京都江東区)

「キューピー。」キューピーといえ、思い浮かべるのは赤色だが、なぜ「グリーン」なのだろう。そう思いながらも、いざブースに入ってみた。簡単に言うと、グリーンキューピーとは、マヨネーズやドレッシングといった製品を、卵や添加物を使わずに植物性の物質で作るといふ取り組みである。これにより、動物を飼うときに出てしまうCO<sub>2</sub>の削減や、宗教上の理由で食べられないものがある人への配慮を実現できるのだ。また、SDGsの2番の達成が期待できる。緑色でもキューピーはしっかりと活躍していたのだ。

筆者はマヨラーなので、今度ぜひグリーンキューピーを試してみたいと思う。

しかし、多くの人が地球にやさしい食べ物に対して「おいしい」というイメージがないと思う。実際僕も、マヨネーズがおいしさを引き立てた絶品お好み焼きか、環境にやさしいマヨネーズが乗ったお好み焼き、絶品かは知らない。だったら、前者を食べたいだろう。でも、そんな風に環境に良い食事がおいしくないと思っている人はとある。ブースに絶対に行ってみてほしい。それはある会社の昆虫食のブースである。



↑実際にFUTURENAUTのブースで配られていた干しココロ (写真の一部を加工している)

その名もFUTURENAUT。次のコーナーで詳しく紹介しよう。

前のコーナーでも紹介したように、エコプロダクツ展には昆虫食のブースがあった。実際に行ってみると、ココロと鳴いている生きたココロギの虫かごの横で干しココロギが配られていた。試しに干しココロギを一つもらい、いざ勇氣を出し食べてみると、特に変わった味ということはなく、なんと大豆っぽい味がした。もし大豆と干しココロギで、格付けチェックをやってもどちらがどちらか分からないかもしれない。新たな食の可能性、そしてそれが普及することの良さを知った。あなたも、新食をさらに浸食させるために、一度エコな食事を試してみたいかがだろうか。

うまいのか。

新食の浸食。

#### 編集後記

最近、私は成長期ですとおなかですいている。でも食べたときに、その料理に何が入っているか、考えたことはなかった。しかし、これからは、エコプロで学んだ食や環境の大切さについて考え、日常が守られていることへの感謝と、これからもそれを守るためにすべきことは何かを考えることを意識して過ごしたい。

# 資源循環新聞

## 循環経済への取り組み

# 有限資源を活用！

現代社会では、「限られた資源を活用しよう」という考え方が徐々に広がっている。だが、認知度の向上に対して、実際の資源の循環率は依然として低い。この状況から抜け出すため、持続的な社会の実現を目指して、多数企業が動いている。

その流れから、「繰り返し循環させる」という循環経済の形に転換し、環境負荷を抑えるべきだ。また、負荷の軽減だけでなく、新たな収益源や独自のブランドを生み出す企業も多く見られる。

エコプロダクツ展でも、循環経済を取り入れた企業・団体が多数いた。例として、フィッシュリサイクルを行っていた三幾飼料工業は、魚腸骨や未利用魚をリサイクルして、飼料原料を製造している。市場やスーパーなどから、廃棄される魚のあらを専用トラックで回収して、ペットフードなどの原料となる魚粉や

## 日本最大級 企業の秘密

魚油の製品化を行っているのだ。高品質な製品を作るために、大規模な回収システムや安全性の高い処理・加工体制を徹底し、循環型社会の実現に向けて日々努力している。ちなみに、魚粉や魚油は家畜や養殖魚の成長に適した栄養素を多く含む。その結果、畜産や養殖を支える手助けともなっている。本来は廃棄されるものから、企業の拡大や新たな製品の生産など、社会の持続に大きく貢献している。ぜひ、日本トップクラス規模の取り組みを調べてほしい。

## 世界初の 醤油燻製材

世界初の燻製材を作ったスモークイフリートでも、年間5万トンも発生する醤油粕を利用して、素材を生かした取り組みがされている。醤油粕を使って燻製した肉は、香ばしく色付けも良い一方で、健康食として美味しく頂ける。このように、廃棄物を新しい方法で使うことは必要だ。



編集後記  
エコプロダクツ展の企業を見て、限りのある資源をどのように使うのか、深く考えさせられました。環境負荷を減らしつつ、新しいビジネスやサービスを開発していて、現代社会に関して実感がわきました。今後も、社会の課題・現状に目を向け、視野を広げたいです。

## 行き先は地中？

13 気候変動に  
具体的な対策を



地球温暖化が世界的な問題となる近年、その原因としてあげられるのが、二酸化炭素である。これからの気候変動対策において、二酸化炭素を減らし、なるべく排出しないようにすることが求められている。今回のエコプロダクツ展でも、気候変動対策に尽力する企業が多く見られた。本記事では、その中でも印象に残った二社をピックアップする。

### 二酸化炭素、大移動！

二酸化炭素を地中の奥深くに大移動させ、閉じ込めることができれば、地球温暖化の進行を抑えられる可能性がある。日本CO<sub>2</sub>調査(JOCS)は、このCO<sub>2</sub>技術を活用した気候変動対策に取り組んでいる。CO<sub>2</sub>は、工場や火力発電所から出る二酸化炭素を空气中に放出する前に回収し、海底の深い地層に閉じ込める技術だ。閉じ込めた二酸化炭素は、地層の中にある水に溶けたり、周りの鉱物と反応して石灰岩になったりする。この仕組みにより、地球温暖化を抑える効果が期待されている。この取り組みが、気候変動対策の切り札となるかもしれない。

### 放射性廃棄物も埋めて処理

環境にやさしい、クリーンな発電方法として、原子力発電があげられる。しかし、放射性廃棄物が出るため、処理に大きな課題がある。原子力発電環境整備機構(NEMO)は、その処理に「高レベル放射性廃棄物」(以下↓ガラス固化体)を活用した安全な処理方法に力を注いでいる。エコプロダクツ展には、本物のガラス固化体が展示されており、ガラスケース越しに見ても、

「硬くて丈夫そう」という印象を受けた。このガラス固化体を厚い金属で覆い、地中深くに埋めることで千年以上もの間安全に保管することができるそうだ。両社ともに地中に埋めることで気候変動対策を行っており、非常に興味深い。

高レベル放射性廃棄物(ガラス固化体)



#### 編集後記

もともと環境問題や、それに対する解決策を調べるのが好きだったので、今回のエコプロダクツ展で紹介されていたエコな取り組みの数々は、とても興味深く、もっと知りたいと思えることが多くあった。そのため、年々増えていく環境問題に対して考え直すことができた。また、気候変動をはじめとした環境問題に対しては、誰か一人だけで取り組むのではなく地球に生きるすべての人がみんなで取り組むべき問題だと感じた。

# 地球に優しいリサイクル

# リサイクル新聞

## 様々な企業の取り組み

近年、地球温暖化対策としてリサイクルが重要視されるようになってきている。実際、2025

年のエコプロダクツ展では、牛乳パックやアルミ缶、ガラスびんやペットボトルなど、さまざまな種類のもののリサイクルのようすがわかる展示が数多くなされていた。しかし、現状いまの日本では、リサイクル率は19.5%とかなり低い。また、リサイクルされたものの大半はエネルギーにするために燃やされてしまうので、地球環境に良いとも言えない。



リサイクル推進のために、エコプロダクツに出展した

企業はどのように取り組んだのだろうか。

例えば、全国牛乳容器環境協議会では、日頃からリサイクル講習会や出前授業などを行い、リサイクルする際に必要な「洗って開いて乾かす」とを教えたり、紙すき体験などによってリサイクルへの関心を高めている。また、エコプロダクツではクイズやパネルを用いて、紙パックの原料である紙を作ることは環境にも優しいということや、リサイクルすると牛乳パック1個分でトイレトーパーを1個作ることができるなど、紙パックをリサイクルすることのメリットを最大限伝えた。

アルミ缶リサイクル協会も、推進しているものの種類は違いますがリサイクルに積極的に取り組んでいる所だ。下図

## 廃棄物の生まれ変わり

からもわかるように、アルミ缶をリサイクルするとまたアルミ缶として生まれ変わることができ

ため、資源を有効活用することにつながる。エネルギーとして燃やしてしまふことなく、新たな資源として利用できることから、「アルミはリサイクルの優等生」と言われている。また、ボランティア活動でアルミ缶をリサイクルした場合、量に応じて収益金を得ることもできるため、ぜひ参加し

廃プラを溶かして作った駒



てみてはどうだろうか。

最後に、上の写真はエコプロに行ったときに日本シームという会社のブースで作った駒だ。この会社は廃プラを資源に変えるための機械を販売していて、環境展やリサイクルイベントなどに数多く出展している。「行き場のない廃プラスチック」を駒やカラビナなどのおもちゃや道具にかえ、それを通して多くの人にプラスチック問題を伝えて

### 編集後記

エコプロでは、リサイクル以外の方法でも、地熱発電やフェアトレード、農地保全などいろいろな方面から環境問題に取り組んでいて勉強になった。今回学んだことをいかし、日常生活でもリサイクルを心がけるようにしていきたい。

## 火山を活かすまちづくり

図1



JOGMECの事業を行う会社がある。また、その

SDGsの7番は「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」だ。環境を破壊しないエネルギー、再生可能エネルギーは太陽光発電、風力発電等、安定しないものが多い。しかし、そんな中、安定してエネルギーを作るための資源は永遠で常に発電を続けられる発電方法がある。それは各地に存在する火山のマグマだまの熱を使う、

### 地熱発電

## 安定した再生エネの普及を

一度地熱発電について説明する。まずは地熱発電の仕組みについてだ。(左図)活火山の付近には地熱貯留層という地熱で作られた蒸気と熱水がたまっている箇所がある。それと発電機を管でつなげる。すると、熱水と蒸気が噴出す。そこで、気水分離機で熱水と蒸気を分離する。熱水は還元井から元に戻り、蒸気はタービンを回転させて発電をする。そこで出た水は地熱貯留層へ戻る。このように、地熱発電は常に発電ができるのだ。

図2

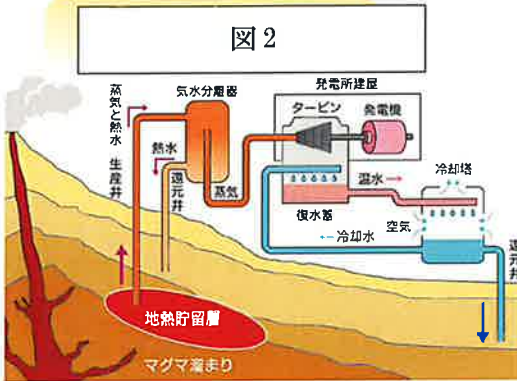


図3



## 地熱発電の現状

周知のとおり、今の日本はエネルギーの約30%を火力発電が担っており、地熱発電を含む再生可能エネルギー(以下再生エネ)は約2%である。このままだと地球温暖化が促進してしまうので少しでも早く再生エネの割合を高める必要がある。そこで資源を減らさず天候にも左右されないのが地熱発電である。この日本には世界一位を誇る地熱資源量を有しているため、地熱を使えば少しでもエネルギーの足しとして安定的に発電でき、近い将来ほかの発電方法と共に火力発電に代わるものでエネルギーの供給をできるかもしれない。そして、地熱は通電をする場所には火山があり温泉地であることが多い。すると、地熱発電所を観光資源の一つとして経済をも回せる可能性がある。

このことから、地熱発電には様々な可能性がある。エネルギーの安定供給、観光資源としての活用…。繰り返しになるが、将来、地熱発電がより一層重要となるかもしれない。だから、今後地熱発電について情報をより一層取り入れた方がよいのではないか。

### 編集後記

私は、この新聞を作成して、改めて日本のエネルギー事情の実態や地熱発電等の発電方法について知ることができた。今回はエコプロで沢山回った中のJOGMECを選んだが、他にも太平洋セメント、カナデビア、明治など面白い展示がたくさんあったので来てよかったと感じた。そして、この体験からSDGsをもっと広めて達成できるように尽力したいと思った。

# 海ごみ解決新聞

## 海のためにできること

### マイクロプラスチック問題

マイクロプラスチックについて知っているだろうか。

マイクロプラスチックとは、海まで運ばれたペットボトルやビニール袋などのプラスチック製品が、波の動きなどにより細かくなったものである。その大きさは、一般的に1mm～5mmとされており、とても小さいことが読み取れる。

そんなマイクロプラスチックだが、どのような点が問題なのだろうか。

先程も説明した通り、マイクロプラスチックはとても小さい。そのため、魚などが誤って飲み込んでしまうことがある。プラスチックは消化することができないため、胃にたまり魚は死んでしまう。また、そのような魚を人が食べてしまうと、体内にプラスチックが入ってしまうことになる。

### 海ごみ問題は私たちにも関係がある

今までマイクロプラスチックについて説明してきたが、実際にこの問題を解決しようとしている人々はいらるのだろうか。

今回のエコプロダクツ展で出展していた岩手県立大学の皆さんは、岩手県の課題となつていいる震災後の沿岸部の環境変化や海ごみ問題について教えてくれた。(ここでの海ごみとは主にマイクロプラスチックのことである)



マイクロプラスチックは、その小ささ故回収が難しいという。そのため、マイクロプラスチックの削減に欠かせないのは、そもそもごみを捨てないことや、捨てられたごみを回収することだそう

あなたの住む地域では、ごみ問題に対してどのような活動をしているだろうか。ぜひ、調べて実際に参加してほしい。

#### 編集後記

今回初めてエコプロダクツ展に参加したが、思った以上に学べるがあったり、率直に楽しかった。環境に配慮して作られた製品に実際に触れることができ、より理解が深まった。今回の学習を通して、環境問題に対する行動は自分たちだけでもできることがあると知ったので、できることが見つかったら積極的に取り組みたい。



マイクロプラスチックは海の生物や人に被害をもたらすのである。

# エコプロ新聞

## 「繰り返し使う」の考え

### 環境にやさしくするには？

SDGs番号十三番「気候変動に具体的な対策を」

これは、今、世界中で大問題になってきている地球温暖化を阻止すべく作られた項目である。そして、この目標を達成するために重要視されている取り組みの一つ、リユース、リデュース、リサイクル。

私は今回のエコプロで、この3Rを成し遂げようとしている会社、ガラス瓶3R促進協議会について知り、その取り組みを調べてみた。

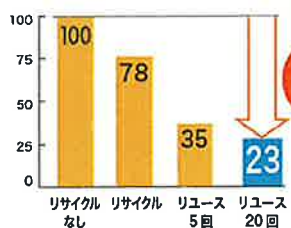
13 気候変動に具体的な対策を



今回私が扱うのは、3Rの一つ、リユースである。なぜなら、リユースは3Rの中で一番環境に負荷がかからず、エネルギーや資源の使用が少ないからだ。そして、ガラス瓶3R促進協議会でいうリユースとは、ガラス瓶を洗って再使用するということ。ガラス瓶は中身のおみや味が移らないので、使い終わった後に洗浄すれば、何度でも使うことができる。この、繰り返し使える牛乳瓶やビール瓶のことを、「リターナブル瓶」という。リターナブル瓶は、回収されて洗瓶工場で洗浄・消毒された後、瓶詰め工場で再び中身が入られ、安全を確保い、商品としてお店に並べられるようになっていく。

## GHG 排出量も ゴミも削減 リニューアブル

リターナブルびんはきちんと洗浄すれば何回でも繰り返し使用できる。リユースすることで、その都度ガラスびんを製造する必要がなくなり、新びん製造量の減少とそれに伴うGHG(温室効果ガス)排出量が削減できる。そして、天然資源、エネルギーの節約、GHG排出量・ゴミ排出量の削減に繋がる。また、洗びんの環境負荷は新びん製造よりも少ないため、リユース回数に比例して環境負荷は小さくなる。例えばビール500mlのリターナブルびんでは、20回使用した場合とリサイクルせずに使い捨てた場合とを比較すると、約77%もGHGの排出量を削減できる。



500mlびんGHG 排出量比較  
(回転数シミュレーション)  
リサイクルなしを100とした場合の排出量

ガラス瓶3R促進協議会は、3R以外にも、新しい取り組みを行っている。この、リニューアブルもそのひとつであり、これは、捨てられるバイオマス廃棄物(生き物からできた資源)を再生可能な瓶原料へ利用する取り組みである。例えば、お米のみ殻を珪砂にしたり、鳥の卵の殻を石灰石に利用したりしている。そのように、バイオマスを利用することによって、資源を無駄にせず循環させることができる。

#### 編集後記

今回のエコプロダクツ展に参加したことで、リアルタイムの世界の現状と、各社の取り組みを吸収することができた。そして、よりエコに、より効率よく、という風に、各自で目標を持ち、社会問題に向かっている姿勢に、自分のいまでできることを探し、身近な取り組みを続けていきたいと考えた。

# インドネシアの森林を守れ

## 森の再生新聞

エコプロ  
2025

### APP インドネシアでの活動

SDGs15 陸の豊かさを守ろう

私たちが普段何気なく接している「森林」。その森林は空気や水の循環など様々な面で我々の生活に欠かせないものだ。しかし、現在経済発展のためなどとして、世界中で森林の伐採が行われている。それは、熱帯雨林が広がるインドネシアでも同様だ。そんな現状を打破すべく、行動をしている企業がある。

APP ジャパンもその一つだ。APP ジャパンの取り組みに「森の再生プロジェクト」というものがある。APP ジャパンは元々アジアの紙製品販売会社だ。

陸の豊かさも  
守ろう  
15



↑SDGs15 陸の豊かさも守ろう

この取り組みは、紙製品の売り上げの一部を寄付して、現地の荒廃した自然林に苗を植えるという活動だ。現地での活動を行うのはAPPが設立した非営利団体ベランタラ環境保護基金。

これまでの活動で94ヘクタールの土地に累計57,553本の木を植えてきた。現在もこの活動は、様々な企業や学校などの支援により継続している。

これらの活動は何も、企業だけのものではない。森の再生プロジェクトには対象となる製品があり、それらを購入することが寄付となり、これらの活動への貢献となるのだ。

### 活動の課題

そんなAPPの活動にも課題がある。地域住民との衝突だ。インドネシアの地域住民は、農業を行う際に「焼畑」をして森林を更地にする。実際に、APPが木の苗を植えた場所が燃やされたこともあったそうだ。新たな植樹を行った際に焼畑を行う地域住民とAPPの間で衝突が起きる可能性も考えられる。

今後は、地域住民との意思疎通や話し合いにより、地域住民に環境保護活動への一定の理解を得ることや、地域住民の生活と、APPの森の再生プロジェクトの両立を図るために努力することが大切になるかもしれないと考える。

### 持続可能な森林を目指して

持続可能な森林を作っていくために、私たちができることは多くある。例えば、森の再生プロジェクトの対象製品の購入やエコマークが書かれた商品の使用などだ。

このように、森林に限らず持続可能な社会を目指すためには、一人一人が、自分にできることを考えて、行動をすることが大切なのではないだろうか。

これからの生活で、自分ができる持続的な社会への貢献を見つけてみよう。

### 編集後記

今回のエコプロダクツ展では、世界を取り巻く環境問題とそれに対する企業の取り組みを学ぶことができました。

また、その過程で自分たち一人一人が環境保全や持続可能な社会を目指すためにできることが多くあることを学びました。

これからの生活で、少しでも環境に対して意識を向けることをしていきたいと思えました。自分が環境のためにできることは何か、「自分事」としてとらえて考えていきたいです。



↑森の再生プロジェクトのロゴ



↑APPが所有するインドネシアの原生林